

令和 2 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02310

研究課題名（和文）日本絵画の復元研究における復元根拠の再検討

研究課題名（英文）Reexamination of the grounds for reproduction in the reproduction study of the Japanese painting

研究代表者

鷹野 佳世子（KARINO, KAYOKO）

東京大学・史料編纂所・特別研究員

研究者番号：40570065

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は絵画の復元工程のうち、特に復元根拠の選定に焦点を当て、調査とワークショップを通して問題点の指摘と解決を図った。ワークショップには若手研究者や学生らの継続的な参加が見られ、人的交流が深められた。調査・取材・ワークショップの機会を通して復元制作現場や研究機関とのつながりも広がり、美術史研究者と実技系研究者、保存科学者らが共同で取り組んだ復元研究事例の研究会を開催した。研究者が分野を越えて絵画の復元について論議し、復元研究の学術的水準の向上を目指す協力体制を構築することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、絵画の復元は様々な目的・手法により数多く制作されているが、学術的な方法論の構築と研究者間の意識の共有が不十分であるため、復元の水準の格差が大きく、鑑賞者にも正しい情報が伝わりにくい状況となっている。今後、文化財保存や教育普及、文化外交、美術史研究など様々な現場で、絵画の復元研究はさらに重要な意義を持つことが予想されるが、本研究では復元研究や復元制作、公開を担っていく研究者、実技者、科学者、博物館関係者らのネットワーク作りに寄与することができた。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the choice of among the reproduction processes particularly the reproduction grounds of the painting. We planned indication and the solution to problems through an investigation and a workshop. A young researcher and continuous participation of students were seen in a workshop, and a personnel exchange was deepened. The connection with the reproduction production site and the research institute also spread through an investigation, coverage and a chance in a workshop, and an art history researcher, the actual technique system researcher and preservation scientists held the seminar of a restoration study case which wrestled jointly. The researchers were able to discuss the reproduction of paintings across disciplines and establish a cooperation system to improve the academic standards of reproduction research.

研究分野：美術史・文化財保存学

キーワード：復元 文化財保存学 保存修復日本画

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本絵画の復元は他の有形文化財の復元(復原)に比べ、未だ研究の土壌が整っていないと言える。文化財保存学の観点からは大学や博物館等において科学調査・学術的考証を経て伝統的な技法材料を用いて制作される復元模写研究が進められているが、一般的にはテレビ番組や観光施設で目にする復元された色鮮やかな絵画が<復元>のイメージとして先行している感があった。公開されたイメージは一人歩きし、見る者に「制作当初はこうであった」と強く印象付けてしまうが、美術史研究者などの専門家にはあくまで創作物と見なされ、研究資料としては軽視されがちなのも事実である。日本絵画の復元が単なるエンターテインメントや展示媒体としてだけでなく、学術研究の成果としても意義を持って活用されるためには、復元のさらなる質の向上と制作者側の自発的な情報発信が望まれると考えられた。

応募者は絵画の復元に関する実情を把握するため、2014年～2016年度、科学研究費基盤研究(C)26370126「日本絵画の復元に関する基礎的研究」に取り組んだ。復元に携わる研究・教育機関や企業、工房への取材を中心に基礎調査を進め、並行して美術史・実技・科学研究者のネットワーク構築および相互理解の促進を目的として、日本絵画の技法材料・科学調査・史料の利用等をテーマとしたワークショップを企画した。本研究は、この基礎研究から更にテーマを絞り、研究の深化を目指したものである。

2. 研究の目的

現在、絵画の復元は様々な目的・手法により数多く制作されているが、学術的な方法論の構築と研究者間の意識の共有が不十分であるため、復元の水準の格差が大きく、鑑賞者にも正しい情報が伝わりにくい状況となっていた。そこで、本研究では絵画の復元工程のうち、特に<復元根拠>の選定に焦点を当て、調査とワークショップ開催を通して問題点の指摘と解決を図ることとした。美術史・実技・科学の研究者が分野を越えて絵画の復元について論議し、復元研究の学術的水準の向上を目指すとともに、復元報告書の内容改善や公開、復元作品の展示手法についての検討も進めた。

前述の基礎研究を通して、復元制作の実作業を担う実技者と歴史学的考証を担う美術史研究者の間で、往々にして意識や価値観の相違が見られることがわかった。実技者は復元に対しても創作意識が高く、表現性や美的・技術的な問題を優先しがちであるが、学術的な復元に際して歴史学的考証は必要不可欠である。歴史的に相応しい材料の選択、参考とする史料・資料の選択と利用方法の判断には、歴史学や宗教学、有職故実等の知識が必要となる。美術史など史学研究者と実技者の意思の疎通ができていなければ、互いの意見を作品に反映させることは難しく、結果として偏った判断に陥る危険性がある。本研究では研究会やワークショップを通じて、学術研究者が実技や材料についての知識を深め、同時に実技者が技法や表現についての的確に言語化して伝えることで、復元の妥当性をより高めることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では多分野に跨る視点から絵画復元事例の復元根拠についての調査、文献資料(史料)や画像資料(史料)の復元への活用法の検討を行い、絵画復元における復元根拠の選定について問題点の指摘と改善案の提示を行った。また、絵画復元に関するワークショップを通して他分野の研究手法や復元を取り巻く問題について理解を深め、若い世代を中心に人的交流を深めた。

研究会では復元の具体的な事例を取り上げ、その復元根拠の妥当性について議論し、現在進行中の復元制作および今後復元制作が予定されている作品についても、復元根拠の選別方法を検討していった。復元根拠についてはその選別判断と同時に、復元完成後の情報公開の問題も重要である。復元根拠を明確に示した報告書は未だ少なく、本研究では過去の代表的な復元事例についても遡って復元根拠を調査し、復元制作における情報公開のあり方についても改めて見直した。また、ワークショップでは実際の復元根拠となる史料や技法材料をテーマとし、実技者と研究者が互いの専門分野についてモノに触れながら理解を深める機会を提供した。

4. 研究成果

(1) 画像資料の復元への活用法の検討

日本絵画の復元研究において復元根拠として活用される画像資料に着目し、美術史研究者が長年に渡って蓄積したポジフィルムのデジタル化に取り組んだ。特に近年になって解体修理が行われた絵画作品については、修理前の画像情報や修理時に実施された科学調査結果が復元に際して重要な資料となるため、資料の散逸を防ぎ、画像撮影時期などの情報整理を適切に行って保管していくことが求められる。美術史研究対象として注目される絵画作品は複数回調査されていることが多く、各研究者や研究機関が所有する画像資料を総合的に参照できるシステムが必要と考えられ、本研究を通してそうしたデータベースの基盤構築を進めることができた。

デジタルアーカイブを進めた画像資料に関しては代表者、分担者、研究協力者の間で共有した上で、経年劣化や改装の影響で画面・形態に変化が生じた作品の記録的画像や、摸本・粉本、絵図、挿図、古写真などの資料を復元根拠として利用する際の問題点や留意事項を確認し、的確な活用法を検討した。また、絵画作品の修復前後の画像比較や点在する調査画像の統合を進め、復元根拠として有効な情報を抽出・整理することができた。

(2) 絵画復元の技法材料選択に関する調査

文化財の復元・複製技術に関して、実制作や研究を進めている実技系大学、工房、研究機関等を訪問し、復元根拠の選択や実際の制作手法について取材を行った。復元・複製技術の変遷や現状と課題を把握するとともに、復元制作に携わる実技系研究者や、監修に携わる美術史研究者らと連携を図り、最終年度の研究会開催に繋げることができた。

(3) 絵画復元に関するワークショップ・研究会の開催

本研究の前身となった科研基盤(C)26370126「日本絵画の復元に関する基礎的研究」では、復元に関わる各分野のテーマを取り上げワークショップを開催してきたが、本研究においても企画を継続実施した。画家・美術史研究者・科学研究者・修理技術者・学芸員など、様々な立場で復元に携わる人を対象に、それぞれの専門分野について理解を深めるためのワークショップを開催したが、これは研究活動の早い段階から他分野との連携意識を高め、多角的な視点を持った研究者の人材育成につなげることを目指したものである。内容は一般向けのワークショップに比べて専門性を高め、且つ大学の座学講義では実施が難しい実演や実習を交えることで、各専門分野について体験的な理解を促した。

初年度は共立女子大学にてワークショップ「復元研究と技法材料」を開催し、代表者と分担者がそれぞれ「日本絵画の復元における技法材料の重要性」、「絹本仏画の技法と表現」という題目で口頭発表および実演を行った。美術史を専攻する大学生・大学院生をはじめ若手研究者等40名ほどの参加があり、日本絵画の材料に直接触れてもらう機会を提供することができた。

次年度は同じく共立女子大学にて「障壁画の復元 - 図様と形態 - 」というテーマで研究発表およびワークショップを行った。「縮図からの想定復元研究 天瑞寺室中旧障壁画「松図」の想定復元制作を通して」および「十二月屏風の趣向 勝川春章「婦女風俗十二月図」(MOA 美術館蔵)の想定復元模写を通して」という2件の研究発表のほか、屏風の紙蝶番の構造を理解するためのワークショップ「ミニ屏風を作ろう」を実施し、参加者に障壁画の復元や屏風の復元、機能に関する理解を深める機会を提供することができた。

最終年度は美術史研究者と実技系研究者、保存科学者らが共同で行った復元に関わる研究事例の報告を持ち寄り、相互理解と交流の深化を目的として研究会「絵画の再生 改装・復元・復元根拠」を企画開催した。研究会では「復元思想と絵画の『写し』」、「御後絵の復元 絵画復元と写真資料」、「佐竹本三十六歌仙絵の諸問題 画風・復元・伝来」、「月次祭礼図の復元について」という4件の研究発表が行われ、特に「月次祭礼図の復元」では愛知県立芸術大学が復元した「月次祭礼図屏風」の現物展示を交えて、発表者と参加者が活発な意見交換を行った。参加者は50名を超え、異分野の研究者が一堂に会することで様々な新知見が得られるとともに、復元の学術的利用に成果を上げることができた。

(4) 実技や保存修復に関わる教材作成

学生や若手研究者への教育普及を目的として、ワークショップや大学での講義に活用できる動画教材、スライド作成にも取り組んだ。特に言葉だけでは説明が難しい表装や修理技術に関しては、「屏風の作り方」、「巻子の作り方」、「掛軸の作り方」等のスライド教材として整備した。また、日本画実技に関しては基本的な絵具の溶き方や箔技法、裏打ち等について、日本画家の実演を記録した動画コンテンツを作成し、研究者間での共有化を進めた。

ワークショップで使用する教材については代表者と分担者が各自の専門性を活かし、効率的に作成することができた。動画やパワーポイントのフォーマットが出来たため、今後の教材作成にも活用できる見込みであり、コンテンツを増やすとともに多言語化も視野に入れている。今後のコンテンツ作りには本研究で築いた人脈を活かし、様々な分野の専門家からの意見や要望を反映していける見込みである。

(5) 総括

本研究は絵画の復元工程のうち、特に〈復元根拠〉の選定に焦点を当て、調査とワークショップ開催を通して問題点の指摘と解決を図ってきた。研究期間全体を通して、美術史・実技・科学の研究者が分野を越えて絵画の復元について論議し、復元研究の学術的水準の向上を目指す協力体制を構築することができた。特に前身研究から継続して開催してきたワークショップには若手研究者や学生らの継続的・意欲的な参加が見られ、着実に人的交流を深めることができたといえる。最終年度には研究分野の垣根を超えて復元事例の成果と課題を報告し、充実した内容の研究会を開催することができた。

今後、文化財保存や教育普及、文化外交、美術史研究など様々な現場で、絵画の復元研究はさらに重要な意義を持つことが予想されるが、需要の増加に対して復元の芸術的水準のみならず、復元根拠の選択の妥当性といった学術的価値もしっかりと担保しながら制作に当たること、そして情報の公開・共有・継承の道筋を整えていくことが求められる。本研究ではその担い手となる研究者、実技者、科学者、博物館関係者らのネットワーク作りに寄与することができたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 鴈野佳世子	4. 巻 No.201
2. 論文標題 本物を超える - クローン文化財 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Re	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鴈野佳世子	4. 巻 13
2. 論文標題 山梨県立博物館所蔵《法然上人絵伝》修理から得られた技法材料に関する知見	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨県立博物館 調査・研究報告	6. 最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 53
2. 論文標題 宝蔵絵の再生 伏見宮貞成親王による「放屁合戦絵巻」転写と画中詞染筆	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 説話文学	6. 最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 53
2. 論文標題 画中詞研究への視座 絵と言葉のナラトロジー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 説話文学	6. 最初と最後の頁 101-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹野佳世子、宮廻正明、並木秀俊、麻生弥希、荒殿優花	4. 巻 展覧会図録
2. 論文標題 クローン文化財の意義	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 シルクロード特別企画展 素心伝心	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷹野佳世子	4. 巻 98号
2. 論文標題 春日厨子絵制作報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 春日	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 3号
2. 論文標題 Futanari, Between and Beyond: From Male Shamans to Hermaphrodites in The Illustrated Scroll of Illnesses	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Asian Humanities at Kyushu University (JAH-Q)	6. 最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://hdl.handle.net/2324/1916274	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 24号
2. 論文標題 共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究 「竹取物語絵巻」「利仁草紙」「異疾之巻物(病草紙模本)」「鳥羽	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 共立女子大学総合文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 140-186
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://id.nii.ac.jp/1087/00003181/	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 430
2. 論文標題 「妙法蓮華経变相図」(静嘉堂文庫蔵)にみる南宋時代寧波の信仰と社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術研究	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本聡美	4. 巻 65
2. 論文標題 フリーア美術館所蔵「地藏菩薩靈驗記絵巻」第一話の主題 女性の罪業としての嫉妬と諍い	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院 文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 347-359
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件(うち招待講演 4件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 京都絵美
2. 発表標題 絹本着色技法の史的展開について 仁和寺所蔵孔雀明王像をめぐる一考察
3. 学会等名 東京文化財研究所文化財情報資料部研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 蓮華王院宝蔵「六道絵」の新解釈 阿修羅道としての「辟邪絵」
3. 学会等名 国際シンポジウムBorders, Performance, and Deities (境界, 芸能, 神仏) 於: コロンビア大学(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 絵巻入門 物語を伝える色と形
3. 学会等名 北京日本学研究中心センター絵巻セミナー 於：北京外国語大学（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 病苦図像の源流 静嘉堂文庫蔵「妙法蓮華経变相図」について
3. 学会等名 東京文化財研究所2018年度第7回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 九相図 朽ちてゆく死体の美術
3. 学会等名 第87 回日本法医学会学術関東地方集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鷹野佳世子
2. 発表標題 日本絵画の復元における技法材料の重要性
3. 学会等名 ワークショップ「復元研究と技法材料」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 京都絵美
2. 発表標題 絹本仏画の技法と表現
3. 学会等名 ワークショップ「復元研究と技法材料」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 京都絵美
2. 発表標題 「技法・材料からみた日本絵画」
3. 学会等名 川崎市教育委員会文化財ボランティア養成講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 宝蔵絵の再生 伏見宮貞成親王による「放屁合戦絵巻」転写と画中詞染筆
3. 学会等名 説話文学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 近世合戦図の図像学 大阪歴史博物館蔵「関ヶ原合戦図屏風」を中心に
3. 学会等名 軍記と語り物研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 The Resurgence of a Picture Scroll from the Rengeo-in Treasury: Prince Sadafusa 's Copy of and Insertion of Poems within The Illustrated Scroll of the Battle of Breaking Wind
3. 学会等名 Movement and Materiality in Japanese Art, The Mary Griggs Burke Center for Japanese Art, Columbia University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 京都絵美
2. 発表標題 復元思想と絵画の「写し」
3. 学会等名 研究会 < 絵画の再生 改装・復元・復元根拠 >
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷹野佳世子
2. 発表標題 御後絵の復元 絵画復元と写真資料
3. 学会等名 研究会 < 絵画の再生 改装・復元・復元根拠 >
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 A journey to religious awakening: illnesses and pilgrimages depicted in medieval Buddhist paintings
3. 学会等名 Columbia University-Waseda University Symposium/Workshop in Japanese Literary and Visual Studies (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 五道説から六道説への転換 中世六道絵における阿修羅圖像の成立
3. 学会等名 PMJS(Premodern Japanese Studies Network) Conference, McGill University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本聡美
2. 発表標題 鬼神道から阿修羅道へ 辟邪絵再考
3. 学会等名 早稲田大学美術史学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 山本 聡美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 224
3. 書名 闇の日本美術	

1. 著者名 加須屋誠・山本聡美編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 259
3. 書名 病草紙	

1. 著者名 山本聡美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 476
3. 書名 中世仏教絵画の図像誌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 聡美 (YAMAMOTO SATOMI) (00366999)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	京都 絵美 (MIYAKO EMI) (40633441)	東京藝術大学・学内共同利用施設等・講師 (12606)	